

白金葎

4 月号



平成 28 年 4 月発行

第 6 2 号

白金葭定例句会案内&拡大句会のお知らせ*

五月二〇日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題：初夏、麦飯

六月一七日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題：柚の花、鵲

*六月三〇(木) 11:30 ~ 15:30 拡大句会(銀座らん月)

七月二十日(金) 12 ~ 15 ア第三兼題：氷菓、月下美人

五月二十日分兼題(初夏、麦飯) 参考句

新潟の初夏はよろしや佐渡も見え

海から無電うなづき歩む初夏の鳩

初夏の山立ちめぐり四方に風

見違えるほどの短髪夏初め

たふたと皮砥をつかひ夏初

伴せはぶらりそんな初夏の午後

嫁ぎゆく子よはつなつの蝶になれ

塩竈の初夏まずは蛸の足

麦飯のところでよいとまけ

麦飯やふと暮れ際の思ひあり

麦飯にやつるる恋か猫の妻

麦飯もよし稗飯も辞退せず

麦飯に拳に金の西日射す

麦飯に黙って暮し五十年

月例句会報(16/4/15 9名欠1(梨花、春眠))

飯田孝三

あら小さき放哉の障子春の山

下町の横丁に惑ふ梨花の花

春眠や夢に誰彼みな若く

また鼻を抓まれ春の大軒

大時計頭上鳴り出づ花曇

増田陽一

春眠のまなうら虹の如きもの

鶯のこゑも夢とぞ木枯忌

昼過ぎて転び易きは花の下

梨花の花千代田線より覗きけり

春眠やヴェランダの鳩棲みつきて

光成高志

BS 俳句H 22

芭蕉(G4)

高浜虚子

西東三鬼

伊藤四朗

高野ムツオ

篠原信久

野木桃花

寺嶋龍

山田征司

水原秋桜子

渡辺寛子

西東三鬼

伊藤四朗

レム睡眠てふ春眠のあとうつら

この一木雪積む如く梨の花

春眠を食りをりし昼の床^{べつと}

光
みち

うち捨てし枝やひかりの梨の花（剪枝）

花曇ひらかね鈍き観音堂

花疲れ胸元ゆるく赤子抱く

夏近き沼に漂ふ浮寝鳥

松村幸一

春眠やゆりかごとなる鈍行車

謎解けぬまま春眠の続きをり

剪定のゆき届きをり梨の花

自転車の力士を避ける春の昼

流れゆく花筏とは絵巻物

吉羽多美子

春眠のぱつと見事に下車したる

観劇の春眠の妻そつとつつく

武者昭七

梨の花鴉水のむ信濃川

行き過ぎて戻る山門花祭

春の風邪浮雲一つまたひとつ

春眠や切れぎれの夢つなぎ見て

墓建つる話に終る花の下

倉田紀子

石段の数かぞへつつ花仰ぐ

一枝にこぼるるほどに梨の花

浅野正美

春眠や鯉魚と泳ぎぬ湖の中

枝伸ばし真白に咲くや梨の花

我が庭に一枝咲きし梨の花

春眠の体内時計狂いだす

春眠を乗せてゆく電車母見舞う

春眠や鳴りし目覚そのままに

佐藤宏之助

春眠の妻に書き置き出掛けるぞ

原爆ドームを目指して燕来る

実のことは想はず梨の花を見る

花の寺香資と賽銭箱に書く

花陰に長谷川一夫の小さき墓

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 一枝にこぼるるほどに梨の花

4 春眠の妻に書き置き出掛けるぞ

4 剪定のゆき届きをり梨の花

3 春眠のまなうら虹の如きもの

3 行き過ぎて戻る山門花祭

3 春眠のぱつと見事に下車したる
観劇の春眠の妻そつとつづく

昭七

宏之助

みち

陽一

多美子

幸一

3 花陰に長谷川一夫の小さき墓

3 春眠やゆりかごとなる鈍行車

2 墓建つる話に終る花の下

2 我が庭に一枝咲きし梨の花

2 春の風邪浮雲一つまたひとつ

2 この一木雪積む如く梨の花

2 花疲れ胸元ゆるく赤子抱く

2 滞空をたのしむ谷の落花かな

2 いと小さき放哉の障子春の山

2 なんと小さき放哉の障子春の山

1 あら小さき放哉の障子春の山

1 夏近き沼に漂ふ浮寝鳥

1 梨の花鴉水のむ信濃川

1 石段の数かぞへつつ花仰ぐ

1 鶯のこゑも夢とぞ木枯忌

1 春眠を乗せてゆく電車母見舞う

1 春眠を貪りをりし昼の床

1 春眠を貪りをりし昼の床べつと

宏之助

みち

多美子

正美

多美子

高志

紀子

幸一

孝三

紀子

多美子

昭七

陽一

正美

高志

宏之助

幸一

宏之助

1 昼過ぎて転び易きは花の下
 1 春眠の体内時計狂いだす
 1 春眠や夢に誰彼みな若く
 1 花の寺香資と賽銭箱に書く
 1 春眠や切れぎれの夢つなぎ見て
 1 春眠や鯉魚と泳ぎぬ湖の中
 1 謎解けぬまま春眠の続きをり
 1 一人居の杯あげて春惜む
 1 春眠やヴェランダの鳩棲みつきて
 1 白井市は白一面の梨の花
 1 うち捨てし枝やひかりの梨の花(剪枝)
 1 秦甸の千里とかや梨の花(木下街道)
 1 大時計頭上鳴り出づ花曇
 1 大時計頭に鳴り出づ花曇
 1 風運ぶ花の匂ひや隅田川
 1 枝伸ばし真白に咲くや梨の花
 1 また鼻を抓まれ春の大鼾
 1 梨の花千代田線より覗きけり
 1 春暁や夢の名残りの醒めやらす
 1 花曇ひらかね鈍き観音堂
 1 花曇鰐口鈍き観音堂
 1 雲に行方問ひをり棚の梨の花
 1 下町や横丁に惑ふ梨の花

陽一 下町の横丁惑ふ梨の花
 正美 自転車の力士を避ける春の昼
 孝三 レム睡眠でふ春眠のあとうつら
 宏之助 春眠や鳴りし目覚そのままだ
 多美子 流れゆく花筏とは絵巻物
 紀子 一句鑑賞
 昭七 春眠のまなうら虹のごときもの
 陽一 うつらうつらして夢多き春眠の眼裏は七色の虹が懸
 高志 っているようなもの。今はやらないようであるが、眼
 底検査でバチイと光を当てられた眼底は目を瞑ってい
 ても真ん丸の青空に虹の縁がかかる。これが美しいの
 だが、いつまでもこの状態がつづくと思ふなと思つた
 ことがあつた。春眠の眼裏もそういう状態にあるのだ。
 無論、掲句はこんな事実とは無関係に詩情として書か
 れたものだが、詩情と科学的事実が一致することも面
 白い要素である。
 孝三 花疲れ胸元ゆるく赤子抱く
 陽一 この句は相当長く醸成されて出来たものではなからう
 昭七 か。何故なら、「ゆるやかに着てひとと逢ふはたるの夜」
 紀子 (桂信子)「花衣ぬぐやまつはる紐いろく」(杉田久女)
 幸一 を連想するからだ。いやそれには関係なく、花疲れの
 孝二 中で赤子に授乳する姿よと作者に言われそうだ。娘が

三人のお子、つまりお孫さんを母乳で育てたのよと云われた。これは作者の自慢のことに違いない。男は、その胸元から発光する輝きを垣間見て目のくらくらした若き日の一瞬を愛でるのである。

春眠の妻に書き置き出掛けるぞ

宏之助

春眠の妻を邪魔せずに「出掛けるぞ」と書き置きをして出掛けたという句。「出掛けるぞ」は口語であつて書き置きにはそんな書き方をしない、そこが俗っぽく俳句には雅なところが一つはなくてはならないという意見が出た。「出掛けるぞ」は、そう書かれた紙きれを指していて、春眠の妻への思いやりが、普段の話し言葉で書かれているのが面白いのだという意見があつて決着がつかなかった。「春眠の妻に書き置きそつと出る」では普通の句である。やはり原句がいい。

我が庭に一枝咲きし梨の花

正美

亡きご主人の植えた梨の木、時を経てようやく一枝に咲いた梨の花よとご主人に語りかけているのだ。梨の木は中国で愛され、その花は風雅・風狂の心を象徴する花であるとか。この度の記念号の昭七さんの文章に書かれてある。ここで思い出したのだが、私の生家にも梨の木が一本あつて春に花が咲き秋に実がなった。高い木であつた。現代は私の記憶にあるような野生の梨の木は見かけなくなつてしまった。梨農家の梨棚を

みると梨が可哀想に思えてくる。秋には幸水豊水長十郎新高とか名前がついて売り出される。それを毎年買いに行っているのは誰だ。

春眠のぱつと見事に下車したる

幸一

春眠は「春眠やゆりかごとなる鈍行車」(みち)のように各駅停車の電車に揺られていると、老若を問わず眠つてしまう。春の気候はそれを助長する。ところがどっこい、目的の駅ではぱつと目覚めて飛び降りる。いや乗り過ごしてぱつと見事に下車したのかもしれない。その素早さに作者が感心している、莞爾として若者を見ている作者。いや俺だよと作者なら言われかねない。

一句鑑賞

飯田孝三

一枝にこぼるるほどに梨の花

昭七

梨の花は清楚。白色五弁、花の盛りは、白い花で枝をうづめる。昔から中国では、その風姿、情趣を詩句に讃える、「梨花一枝春雨を帯ぶ」。花でうづまる枝ぶりが、ひとときわ目を惹き、人の心をとらえるのだ。掲句は、「梨の花」の真実にせまり、上中脚「に」を畳んで、ありありと目に物見せ余すない。「ほど」の和氣がいい。あたりに広がる梨棚の景色を髣髴させる。歳時記の例句には、季節にこと寄せる風の主情の句が多いが、それらを抜けて端的、客観の一句である。

春眠のまなうら虹のごときもの

陽一

春の眠気は心地いい。夢うつつの間^{あは}い、虹の「如きもの」に見^まみえるのだ。「虹」の彩りはほのぼの艶めき、妙なる春の気色をただよわす。さてまなうら、虹の懸橋にどんな思いを馳せるのだろう。仮名「まなうら」のやさしさ、漢字「如」の具象性が渾然と詩情にとけ込む。さらなるご託宣は野暮、ゆめゆめ春の眠りを毀すまい。朝日が目裏を染めたとしても詩の機縁にすぎない。

姑へ春眠覚むる身の置き処

幸一

はしくも昭和も前半の世に目覚める思い。団塊後の世代にはこの気持ちはおそらく無縁。なにせ女性の職場進出が広がり、爺婆はなべて後期高齢、一方待機幼児・児童がふえるばかりだ。父権衰退も目に余る。ご免なさい、幸一さんも小生も守旧頑迷の塊じやありません。句の主になり代わり、ふと、無常迅速の思いをもらしたまでです。いささか怨をこめ、そこはか艶を帯^はくきらいは、せいぜい年配のせいと思し召せ。

春の風邪浮き雲一つまたひとつ

多美子

春の風邪は重くはないが、ぐづぐづ長引く。この頃では、花粉症ばやりもあって、なおさらやりきれぬ。「浮き」雲はそんな春の気「鬱」さにも通うだろう。上空を浮かぶ綿雲は、まさに春の長閑さと気憚さの表

象。「一つまたひとつ」が一々目に物見せ、ほのぼの春の気風を募らせる。

剪定のゆき届きをり梨の花

みち

梨の栽培は、枝を矯めて棚づくりするのがこつ、すなわち「剪定」がなによりいのち。「をり」の切れ鮮やかに、花の風姿と梨棚の全容を余すなく眼前させる。贅言無用。句姿整然、正統、品格の一句である。

春眠や鯉魚と泳ぎぬ湖の中

紀子

歳時記を繰ってもこんな大きな「春眠」の句はまづ見当たらない。「鯉魚」は鯉、瀧水を溯り、気力あふれる魚だが、敢えて古語「鯉魚」を措く、そこがさわり。「春眠」の夢は、「里鯉」泳ぐ漢和の古典文芸、現代作品の境に遊ぶのである、さらにはその道の碩学にお願いしよう。

白井市は白一面の梨の花

高志

白井市は下総台地上に位置する千葉県北西部の市。住宅地化が進んでいるが、梨の栽培が盛んな地。北総開発鉄道の車窓から眺めたか、その地を訪ねたか、「白」「白」を畳み、イ七音を連ねる韻きめでたく、一面、花でうづまる梨畑が視野に広がる。平明。晴天の景と見たい。白井市は市制施行十五年を迎えたばかりだ。花陰に長谷川一夫の小さき墓

宏之助

ところは東京・谷中の墓地、桜並木の墓地道を隔て、

五重塔跡の向いに「墓」はある。「去来の墓」ほどではないが、明治以来の顯臣、名士らの墓石が立ち並ぶ一帯では、慎ましい佇いだ、舞台、映画時代劇で名声一世を風靡した、昭和の二枚目大スターに似合わず「小さい」。折から花時、「花陰」は、また、往時の声名に馳せる思いでもあるだろう。(出句一覽掲載順)

一句鑑賞

武者昭七

花陰に長谷川一夫の小さき墓

宏之助

墓には枝垂桜が多いという。枝垂れた枝を伝わって死者の霊が天上と地上とを行き来するためだという。

美しい幻想である。旅の途中、列車の窓から目に入るそんな景色を眺めてはこころ打たれたことも何べんかある。珍しい景色ではない。長谷川一夫は言わずと知れた天下の人氣俳優だ。そんな大俳優の小さな墓がひっそりと桜の下にたっているという情景は何ともつましくゆかしい。桜の華麗さと対照的な小さな墓は生前の名優の華やかさとそれゆえについてまわったであろう孤独とおもわせる。いまはそんな俗世間からも解放されてのどかだ。句のリズムも澄んで静かである。

春眠のまなうら虹のごときもの
春眠や切れぎれの夢つなぎ見て
春眠や鯉魚と泳ぎぬ湖の中

陽一

多美子

紀子

謎解けぬまま春眠の続きをり

みち

いづれも春眠の不可思議をいう句。うつらうつらとたどる春眠の世界は中空にかかる虹のように定かならぬ形と色彩の世界。筋の通らぬ切れぎれの断片をつなぎ合わせたような混沌とした物語の世界。鯉魚とともに泳ぐ湖水は底知れぬ無意識の湖であろう。醒めてあとも漂う夢の世界は中有の世界かも知れぬ。

滞空をたのしむ谷の落花かな

幸一

雲に行方問ひをり棚の梨の花

〃

谷から吹き上げる風に煽られてしばし空中を浮遊する落花の舞い姿である。落花を惜しむこころを逆に落花の側に身をおいて空をただようことを楽しんでいると見たのだ、あえかな落花のうちなびく情景を「滞空」という武骨な漢語でとらえたところが俳諧であろう。自在な詠みに敬服。

二句目。雲と梨の花の対話である。「オーイ雲よどこまで行くんか」「わしゃ知らん。風に聞いてくりよ」「のんきでええのう」というところか。呼び交わす雲と花。作者のおおらかな自然観がおのずからにじみ出る。万象有情。自然界は明るく楽しい。

ハガキ句 62 報 (11・10・7)

竜天に登り海底靴みける

霾や全面地震の朝刊来

羊三

敏子

炉心溶融捨メルトダウン身で防ぐ春疾風

孝三

連日のニュースに倦むと亀鳴けり

高志

炊き出しのテントをゆする春疾風

多美子

津波禍の鹹おほゆき地に遅桜

空華

災害の記事積む春を無為なにもせず

陽一

春暗しああ節電の上野駅

彰一

春暁の余震に起きてまた眠る

悦子

犬ふぐり世の中捨てたものでない

啓泰

ハガキ句 62 報管見

犬ふぐり世の中捨てたものでない

啓泰

早春、他の草がまだ出ぬ頃から、地にびっしりと萌え出でて可憐な花を咲かせる犬ふぐり。人の世は、悪いやつもいるけれど、殆どがいい人である。互いに助け合う情もある。人間、百パーセント幸福、百パーセント不幸という事はない。転んでも只では起きぬ強さを人は持っているものだ。世の中捨てたものでない。地を見なさい。犬ふぐりが咲いているじゃあないですか。犬ふぐりという名を持った早春花の本意の一つに格上げしたい（高志）。

春暗しああ節電の上野駅

彰一

いま東京の夜はどこも節電で暗いけれど、東北の玄関口の上野駅の暗さが災害の惨状を思はせた（悦子）。

炉心溶融メルトダウン捨身で防ぐ春疾風

孝三

この句の言葉の奥に作者の祈りの心を見た。今、日本人は皆己の心に向きあつて、祈りの中にある。若い僧が宮古から石巻まで犠牲者の鎮魂の旅にある。義捐金に百億円を申し出た経営者もいる。石川遼君は今季の賞金は皆寄付すると云う。俳優の「雨ニモマケズ」の詩の朗読もいい。日本人のいいところがこの震災で揺さぶられて出てきたのだ。捨身で防ぐ原子炉の炉心溶融。作業者を気遣い、春疾風は、やがて薫風になり南風になりますようにと（高志）。

俳窓評論纂

＊佐藤宏之助さんより俳誌「郭公」四月号をみちさんがしばらく借用した。中に俳壇の今という題で最近の総合誌二月号から秀句を紹介されている内に宏之助さんの八ッ場ダム取材句が載っていること、又みちさんの郷里の友の句も載っているからである。私は同居の誼で読んだのでここに紹介する。

佐藤宏之助

枯原に立つ電柱の役終へて

ダムとなる杜に最後の注連を張る

起重機が年越す雪を積みしまま

「俳句は「季物」と「もう一つの物」との取り合わせを詠うことという作者の思いの籠った句である」と選

者の評言がある。その他知人の左の句が上げてあつた。
水槽に鯛が足されて春近し

水替の鯉を鹽に山桜

茨木和生
榎本好宏

水替の鯉を鹽に山桜（S. 57 茨木和生）が今では有名な句であり、桜鯛を云わず、春近しという季語でこれを抜かした一種の抜けの手法である。好宏さんの句では私の句を思い出した。「漁夫当る大工が焚ける缶焚火」（H. 4 東京新聞）。残された大焚火に誰が当っているかは省略されてある。私のは大工から漁夫にバトンタッチされた缶焚火である。俳句は季語と物との取り合わせである。今さらのように思う。

*また佐藤宏之助さんより天狼「橋本多佳子追悼号」を御貸し頂いた。昭和38年8月号である。忌日は五月29日である。二月に入院されていたのだ。誓子先生は入院以後という前書きにて「病院にとぶ蝙蝠は誰が化身」他五句を書かれ、奈良火葬場として「君が先導君を焼く青山へ」他四句を、筑波山として「重なりて男峯一峯青きのみ」を追悼句として巻頭に発表されている。多佳子二十句の最後は「蝶蜂の如雪溪に死なばと思ふ」を取られてある。更に平畑静塔の奈良日吉館句会での様子を書いた文章には、時を経てはじめてわかる大切な時と云つたらよいのか、その辺の事実を「私共もいさゝか魔境にさまよつていた輩であつたかも知

れないのだ」とある。本誌のような小さな俳誌では詳しく紹介できないけれども、私は紫式部が源氏物語という歌の世界に没入してあれだけの小説をものしたのと、橋本多佳子が男の中に入つて骨身を削つて「必死の気組み」で取り組まれ、あれだけの名句をものされたのは同類のことであると思つた。自分の感情が万人の感情になるように己と闘つて己のオリジナリティをつかんだ女性である。

お便り広場（到着順、敬称略）

白金蔭三月号頂きました。いい色ですね。皆様の益々の充実全く圧倒されてだんぐ縁遠くなる思いです。私の専門の構造設計は見做しの上の見做しで設計するものですから、実状と全くかけはなれています。その上基本の数学力学もいい加減ですから恩師の後藤先生から終生怒られっぱなしでした。本当にありがたしい先生でした。光成さんも奥様も御身体は十分氣をつけて下さい。
（3・28 小山陽也）

《璃子さんからの手紙》

光成高志様 前略黄色の白金蔭にびっくりでした。いずれにせよ、風水では黄は良い色のように思います。あまり興味をもたないので詳しくはしろうともしませんが一寸頭の隅にありましたので、「世の中にたえてさ

くらのなかりせば春の心はのどけからまし」業平さんも、桜の開花を今日か明日かと心落着かぬ現代の人々と同じ思いであつたのでしょうか。いよくと云うかやつと咲き始めました。寒い春ですのに、東大寺法隆寺中宮寺とお疲れの御事と存じ上げます。修二会は季

語で知るのみ、夜半までの行事とはただぐ驚き入り、ペンを動かすのもご法度とはきびしいものですね。その場を体験なさつたればこそのお二人の御句、想像を逞しくしつゝ一句一句追うております。行きたくても今の私には云いたくなくても人様から高令と云われる身、行けるはずもなく、紙面から楽しみを味わつております。春炬燵にばかり居る人間と旅やら外出やら活発になさつていらつしやる方々との違いを身に入みて感じます。選句結果より私ごのみをほんの一部

・鳥曇大仏様は修理中

敦子

作意的でない写生が心を打つのを改めて感じました。

・春愁か人形焼のけふの顔

幸一

さり気ないユーモア。

・内陣の洩れ灯女人の修二会の座

みち

考えさせる句、情景がはつきり見える。

・声明やサンゲサンゲとある修二会

高志

まさにその場に居る心地です。

・沈めゐる砥石泡吹く寒もどり

紀子

寒もどりの寒さ、女性には珍しい砥石と云う意外性。

五周年記念号完成に向けますくくご多忙の御事と存じ上げます。先ずはご健康第一にご多用の時期を乗り越えて頂きたく存じます。

光成高志様

三月二十六日

長屋璃子

拙句 日昇れば花ぐもりとや申すべき

璃子

(かげ) ー璃

(かたむ) けばーご指摘

少々調べました。 昇 漢和辞典 辰カタムく

傾カタムく

陰る カゲる

翳る カゲる

◎現代俳句用語表記辞典 三谷昭編 富士見書房

陰る かげる

◎昇る カゲる

翳る カゲる

傾く カタムく

あの雲の昇り来るべし秋の晴 (S18) 高浜虚子

菊昇るところに翳のあるやうに 倉橋弘躬

ご指摘下さいました辰カタムけばは右の如くであります。

私の思うに(昇く)は時間的要因の表現、(昇れば)

は天候の変化が要因のように感じます。夕方には日は

かたむき、日中でも雲が出たりすればかげる。

そんなつもりで句ですので、私としては原句どおり、
かげればといたします。不遜な申し条お許し頂けます
か。(璃子さん、恐れ入ります。こんなに調べて頂いて。私は
広辞苑や漢和辞典に戻るがないものですから、漢和辞典に基づ
いてあのように指摘しました。後で手許の俳句用語辞典 石原
八束・金子兜太監修一九九一飯塚書店を見ましたら出ていまし
た。戻る。日が傾いて光が薄くなる。陰になる。俳句で主に使
用されている語。用例の句は「寒菊のくれなゐふかく戻りけり」
(金尾梅の門)「岩戻りそめて駒草戻りけり」(森田 峠)でし
た。電子辞書の漢字源には、戻(ソク)は尸十人からなる会意
文字で、人ががけに身を寄せることを示し、一方にかたよる意
を含む。戻(ソク)は「日十戻(ソク)」。日中則戻(日中すれ
ば則戻く(易経)の用例が出ていまして、かげるの説明はあり
ません。木下夕爾の句集に左の句があるとみちさんの指摘があ
りました。「水仙にすぐ日の戻る一ト間かな」(夕爾)。日の戻る
は俳句では普通に使われているようです。私の無知が不用意に
コメントさせてしまいました。高志

拝復 このところ低温で桜も長持ちしそうでござい
ます。みのり多きこの旅のご旅行、ご無事にご帰省お
めでとうございます。 修二会は季語で知るのみ、実
際にご参加には申し込みなどお手数もかゝるのですね。
白金蔭誌上の参拝紀行でさまぐの経験をなさいま
したことを存じ上げ、その場なればこそそのお二人の秀句

を楽しませて頂きました。

お忙しくお疲れの中、私に迄おみやげを下さいまし
て厚く御礼申し上げます。立派で大きくそれぐ由緒
深き絵などの散華^{さんか}は今迄東大寺で実際に撒かれた
のを入手した方から頂いたり、私共の菩提寺で撒いた
のを拾ったりし、手許にあります、もつと小さく紙
も和紙ではありませんので誠に見事でびっくりいたし
ております。たまくお彼岸の墓参に行き、お寺で頂
いた小冊子に散華の扱いが載っておりましたので、余
計なお世話百も承知とは存じますが、コピーして同封
いたしました。都内より私共の辺りは桜の咲き具合が
少々遅いようにも思います。が御地はいかゞでしょうか。
桜の名所は各地に多いのでそんなに足を延ばさずも楽
しめると存じております。早い種類のは葉桜になった
ものもあるようでございます。花冷えとは優にやさし
く聞こえますが御体調を崩されませんようにお氣をつ
けて下さいませ。御礼まで。

みち様 三月六日 璃子

今年も早や四月に入りました。桜の花もやがて満開
の季節です。お変わりありませんか。私はまあ元氣で
す。先日新聞に出ていた福山市老人クラブ連合会事務
局長多田三千男さんとお話する機会があり発刊次世
代へのメッセージ贈ります。本棚へでも置いて時間の

ある時に目を通して下さい。私は十五才国民学校高等二年生の時でした。高志は三才位であまり記憶にないかと思いますが私は鮮明に覚えています。先日三月下旬天神グラウンド前の高い山あちこちに咲いている白い花 何んの花だろうと質問され山桜では早すぎるとすれば多分（小節無節 これは建築材のことか？）辛夷という花でしようと思えた。（辛夷）（小筆）こう書くかなー漢字が思い出せない。まだぐく花冷えのする季節です。お体ご自愛ください。高志敏子さんへ

先日（3／29）尾道済法寺参りなど寺めぐり。
（4・4健三）

辛夷咲く空は青空春の山
坂の町花に誘われ千光寺
千光寺花に誘われ坂の町

（「辛夷咲く空を仰ぎて寺めぐり」とか、「空青し前の山には辛夷咲く」とかして二つの季語を避けて下さい。それから、千光寺といえは尾道、尾道と云えば坂の町、皆知っているのです、花に誘われを「花の寺」と省略してあとは何か物を七五で付けるのがいいです。例えば「花の寺瀬戸の島々前にして」とかです。俳句は約束事がありますが、まず己を捨てて自然に没入する気持ちで自然（季語）をよく見て下さい。文芸の一つですの、芸も要りますが、それは後でなんともなります。主観を離れて客観に徹するのです。弟の言葉ではなく俳人の言葉と受

け取ってください。一寸厳しいことを書きましたが、懲りずにまた書いて送ってください。高志

会費＋同封致します。五月まではをつけます。

古代は別便です。漸く四月からひまになりました。（中略）少しづつ元気を出していけそうです。五月は小学校―高校迄級が違つても同じ学校にいた親友と音楽会に二日誘われました。皆様の益々の活躍を祈ります。

（4月12日 小山陽也）

拝啓 今月は欠席投句にさせて頂きます。というのは先週金曜日にうちの駐車場の桜がきれいなので今年の花見はここで済ませようとカメラを持って右往左往しているうち車止めのコンクリートに足を引っかけて転び右腕を骨折しました。一応整形に行き腕を固められているので遠出を控えたく、お粗末なことであります。「国展」の案内ハガキ同封、行つて下さる（かもしれない）方が居られましたら差し上げて下さい。（八田木枯さんの忌は三月十九日でした。それでは皆様によりしくお伝えください。）
（4・13 増田陽一）

先日例会ではお世話になりました。あつという間のひと時でした。『五周年記念特集号』見事です、偏にご尽力のおかげです。刊行が待たれます。異常気象下で大地震がくり返される、不穏の日々がづく中、ご夫妻どうぞ御身ご大切に、ご健吟のほどを祈りあげま

す。お礼まで。草々 (平 28 年 4・17 飯田孝三)

四月の例会では宏之助さんとも久しぶりにお会い出来、紀子さんのお元気な姿も拝見出来て、楽しいひと時でした。今回は宮沢賢治に触れた駄文を少々ものしましたので同封しました。扱いはおまかせしますのでよろしく。 (4・19 昭七)

(すでに頂いている尾崎放哉の句その三が済み次第掲載します。八月号からの予定です。)

受贈誌 (H 28 年 4 月号)

げんげ田を底辺として富士聳ゆ(彩 128)

平野ひろし

鶯の何ぞや午前三時半 (〃)

〃

鍋の中ぐらりと浅蜷裏返る (〃)

〃

蚕豆の莢の中にも水子あり (〃)

〃

臍の緒があり蚕豆の胎蔵界 (〃)

〃

庫裏に干す夫婦搔卷裏武甲(あすか 4 月号)

山尾かづひろ

山葵田や過ぎゆく風の青かつし (東京クラブ 4 月) 璃子

磯宮を覗く海猫九十九里 (〃)

万世遊

こだま (山尾かづひろ吟行ノート 4・8)

勧め売る九十九里産蛤を

みち

合はせみる手形の遺品花曇

〃

臉に生きる誰彼桜咲く

孝三

満開のの岸の桜に遅れたり

〃

蛤の椀一杯を白くせり

高志

蛤ややつぱり源氏物語

〃

(彩 128)

初詣櫃の大木傘に入る

光成高志

餅焼くや膨れはたまた裏返る

〃

尾崎放哉の句 その一

武者昭七

春の山のうしろから煙が出だした

(大空)

「放哉の手帳の最後に書き付けてあった辞世の句。

ある安らぎの感じが有り春の訪れを喜ぶ素直な自然迎合の響きが聞こえる句である。」(楠本憲吉 近代文学注釈

体系「近代俳句」頭注)「なだらかな語感の中に春を喜ぶ

気持が素直に表出されている。暖冬の瀬戸の島とはい

え春は待たれるであろう。・病は放哉を再起不能にし

た。このどうにもならないことが、この「春の山の」

安らかさを放哉にもたらした。「煙が出だした」には待

ちに待った春をよるこぶ気持が直裁にうちだされてい

る。」(大野林火「近代俳句の鑑賞と批評」)

以上二つの手元の資料から抜き出してみました。と

もに「春を喜ぶ気持」を読みとつていますが「煙」の

正体には関心がないようです。吉村昭の小説「海も暮

きる」によれば放哉の南郷庵のうしろの山には墓地と

火葬場があつて放哉はよくそのあたりを歩き回つたようです。

墓のうらに廻る

という句もあります。墓の後ろに廻つてそこに刻まれた戒名やら没年やらを眺めては墓の中のひとを偲んだのでしょうか。死者に対する親しみがかんじられます。放哉の亡がらもいったんそこに葬られたあと、あらためて火葬に付されたようです。そんなことを思うと山のうしろから立ち昇る煙は火葬の煙のように思われます。死を覚悟した放哉が静かな心境で立ち昇る火葬の煙に見入っている、そんな姿が想像されます。この句に感じられる安らかさは春という季節を迎えた安らかさであると同時にそのの経てきた人生に自足しているひとの安らかさでもあるように感じられます。

芭蕉の軽み以後（48）

光成高志

その年（延宝八年）の九月には杉風の『常磐屋句合』が成りその判詞にも莊子の心ばえが明らかに読みとれる。例えば第七番の判詞は

左

蜈むかで入り栄螺の洞に潜ひそまつてけり

右勝

独活の千年能なし山の杣木かな

むかで苔の住所、さざいの洞に求めたるも珍し、右はまた、能なし山のうどの大木、千とせを経たるも奇也、此山いづれの所にや、山海経にも見え、もし無何有ムカユウの郷きやう廣漠の野につづきたる名所か、彼の大樽しを捨てざるのためしもおもひ出られて、うどの大木又愛すべし。

この常磐屋句合の跋文は芭蕉の点取俳諧へのお別れの文章になっていると思う。先の『貝おほひ』の序から飛躍して諧謔が横溢しているのは、そのせいかと思う。あまりにも面白いので左に写して置く。

「詩は漢より魏にいたるまで四百余年、詩人・才子・文体三たびかはるといへり、倭歌の風流代々にあらたまり、俳諧年々に変じ月々に新也。今こゝに青物の種々をあつめ、二十五番の句合となして予に判をこふ、誠に句々たをやかに、作新しく、見るに幽也、思ふに玄也、是を今の風体とはいはんか、且是に名付けて常磐屋といふは時を祝し代をほめての名なるべし、つらつら神田須田町のけしきを思ふに、千里の外の青草は、麒麟につけて之を運ばせ、鳳の卵は糠にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の葉人參、緑もふかく、唐のからしの紅なるも、今此江戸にもてつどひ、風唐黍あきたの朶たをならさず、雨土生姜をうごかさねば、青物の作意時を得て、かいわり菜二葉に、松茸の千年を祈

り、芋の葉の露ちりうせずして、さゝげのかづら長く
つたはれば、そら豆をあふぎて、今此時をこひざらめ
かも冬瓜かもり。」今私は菜園と俳句を生活の両輪の如
く回して過ごしているせいか、意味が何となく分かつ
て最後の冬瓜の切れて爆笑した。ここは現代風に冬瓜
ととうがんと読んでお終いにしても面白い。更にこれが古今
和歌集の序のもじりであることを知って驚いた。芭蕉
この時はまだ桃青であるが、ほんとに博覧強記、機知
に富み愉快な人というイメージが浮びあがる。こうい
う人に接すれば「先生弟子にして下さい」と言つて師
に乞われるのではないだろうか。此頃から和漢朗詠集
などから取った漢詩的な句が増えだしたのは、談林風
の行き詰まりを打開する新しい試みであつた。先の田
舎句合の判詞の跋には「栩々斎くささい主桃青」とサイン
をしていることは、莊子の研究の証である。

我孫子日記

	3/18 例会
*	3/30 銀座
*2	4/5 孫子山 我の横
*3	4/6 寺高松 虫吉大 &の
*4	4/8 寺王野 天→上
	4/13 SOA
	4/15 例会

*真珠店眞鷹桜店頭に
*2 我孫子にも崖はけの道あり桜咲く
*3 真直ぐなる機械蛙塗り乾きをり
高志
〃 〃

確とわかる盛土は土葬すみれ咲く
回廊よりしだれ桜に手を伸ばす
筍飯供へてありし辻地蔵
豆の花みな福耳の葉を立てて
百姓家太郎次郎の鯉幟
*4 甘茶仏もろ肌脱ぎて立ち給ふ
一陣の風出て池に花吹雪
何杯も甘茶いたたくイラン人
甘茶掛くお点前のごと構持ちて
みち
〃
〃
〃
高志

編集後記

今月は、宏之助さんからお借りした橋本多佳子追悼
号に心打たれ切なく詩うたの実まことに触れた日々があ
つた。ゴッホも芭蕉も己と闘つてほんとの個性をつか
んだ人、そういう人がほんとの芸術家であつて、この
世の実まこと両立させるのは難事であると思う。そう
いう人生があるというのはほんとに人間つていうもの
はうれしいかなしいものだなあと思いつつ。

五周年記念号は3校をチェックして連休中から印刷
製本、五月末刊行の運びになります。

白金霞四月号(第62号)平成28年4月発行
編集・発行人 光成高志…(〇四―七一八七―一〇六八)
発行所 二七〇―一一一九我孫子市南新木2・14・17
表紙の題字…加納綾女。写真 4月21日の白金霞